

# 排他と頼杖——作家イメージの類型論

永井 久美子

## はじめに

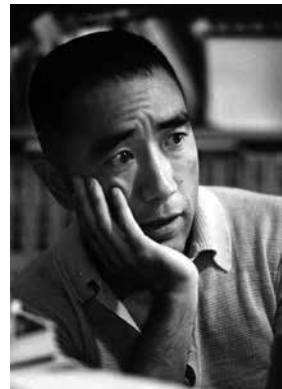
作家の肖像写真には、頼杖をつく姿のものが少なくない。夏目漱石、芥川龍之介、太宰治などの例が有名であるほか、現代の作家に至るまで、<sup>いとま</sup>杖挙に違がない。作家に限らず、知識人と呼ばれる人々の大多数に、頼杖をつく姿の写真があると一言しても過言ではない。ものを考える際に意識せずつくこともあれば、知的に見せたい場合などのポーズとして意図的につくこともあるのが、頼杖であるだろう。

頼杖をつく姿勢は、時代や地域、年齢や性別を問わず、多くの絵画や写真に見ることができる。頼杖は、なぜこれほど頻繁に肖像に現れ、浸透しているのか。作家の場合、執筆中の姿と同等かそれ以上と言ってよいほどに、頼杖をつき思索する肖像が目立つのはなぜか。日本の作家の場合について、頼杖をつく肖像の類型と源流を探る。

## 文学の「毒」と三島

はじめに、みずからの美意識を体現する写真を数多く残した作家である三島由紀夫の例を考えてみる。生前に企画されながら、三島の自決により出版が頓挫していた篠山紀信撮影による写真集 *The Death of a Man* が2020年にニューヨークで刊行されたことは、三島が発し続けた自己イメージが、没後50年を経てなお注目され続けていることを表しているだろう。

多種多様な三島の写真が知られる中で、2010年以降の『読売新聞』では、頼杖をつく三島の写真が繰り返し用いられている（図版1）。初出は昭和42年（1967）朝刊の連載「わが構想」に三島が登場した回の「地球につめ跡を」であり、同記事において三島は、ライフワークたる「豊饒の海」に取り組む意



図版1 『読売新聞』昭和42年（1967）7月2日朝刊「わが構想 地球につめ跡を 三島由紀夫」より  
写真提供 読売新聞社

気込みを語っている。右手を頬にあて、首をややかしげ、目線は斜め右に向ける三島の姿はその後、平成22年（2010）の自決40年の関連本や舞台の紹介、平成24年（2012）および平成29年（2017）の書評、谷崎潤一郎の「金色の死」と三島の自決との関連性を記した平成22年（2010）大阪版夕刊の文化面の記事にも掲載されている<sup>1</sup>。

頬杖をつく三島は思索にふける様子であり、ものを考える彼に近くで接しているような印象を与える接写の一枚である。三島の写真としては市ヶ谷駐屯地での演説姿も有名であるが、この姿は政治活動家としてのイメージを強く有し、作家の肖像としては、特定の事件を想起させすぎののだろう。『読売新聞』では他にも、やや遠くを見据える三島の写真が掲載された例も複数あり（図版2）、三島の文学作品を振り返る際には、思索する姿の肖像が好まれる傾向が認められる<sup>2</sup>。

開襟シャツ姿の写真では、首から上のみにトリミングされると分かりにくいものの、胸板が厚く、鍛えた体躯である様子が窺える。三島は30歳でボディビルに取り組み始め、以後、剣道、ボクシング、空手と鍛錬の幅を広げ、40代以降には、自衛隊への体験入隊を繰り返した。三島のスポーツ愛好は、作家の「意外な」趣味として報じられることが多く、創作とは切り離されて報じられることも少なかつた。三島の趣味を報じた新聞記事は、『読売新聞』のデータベースでは現在、「余暇」に分類されている<sup>3</sup>。



図版2 『読売新聞』平成27年（2015）7月8日東京朝刊文化欄「三島と五輪（上）想像は強い肉体から」より写真提供 読売新聞社

1 『読売新聞』昭和42年（1967）7月2日朝刊18面「[わが構想]地球につめ跡を 三島由紀夫氏」、平成22年（2010）11月9日朝刊文化面「いま迫る三島由紀夫の本質 自決40年 関連本・舞台など続々」、平成24年（2012）2月23日大阪夕刊文化面「[食いしん坊・谷崎] 金色の死「美の実践」の欲求投影」、平成24年（2012）11月25日東京朝刊書評「[三島由紀夫]ジュニフェール・ルシュエ著 心のひだまでくっきり」、平成29年（2017）7月23日東京朝刊書評「[HON ライン倶楽部] どっち派？ 川端康成 三島由紀夫」。

2 平成27年（2015）7月8日東京朝刊文化欄「三島と五輪（上）想像は強い肉体から」、平成27年（2015）10月25日東京朝刊「書評C「よみうり堂から」」、平成30年（2018）1月3日東京朝刊社会欄「川端・三島共に最終候補 67年 ノーベル文学賞」、平成31年（2019）1月22日東京朝刊文化欄「ノーベル文学賞1968年（下）三島落選と文壇秩序」、令和2年（2020）10月26日東京夕刊社会欄「[三島11作]新版人気作家が解説 没後50年 今月末、新潮文庫」。

3 三島の乗馬趣味を報じた「策馬」（『読売新聞』昭和25年（1950）10月30日朝刊第4面）、および後述の「レジャー拝見」。

のちに樋口進『輝ける文士たち——文藝春秋写真館』(文藝春秋、2007年)や樋口進・川本三郎『昭和文壇実録 小説家たちの休日』(文藝春秋、2010年)にまとめられるように、創作時以外の作家の姿を写す写真が『別冊文藝春秋』などに多く掲載されたのは、執筆時の姿が作家の肖像として定着していたことと表裏一体の関係にあり、「休日」の姿を見ることで、作家の人となりをより深く知ることができる<sup>4</sup>と見做されたことを示しているだろう。たとえば令和2年(2020)に没後50年の新装幀・新解説で刊行された新潮文庫の「初めて出会う新・三島由紀夫」シリーズを紹介するサイトに笑顔の三島の写真が複数並べられているのは、従来の三島には気さくに笑う人物としての印象が薄かったことに由来するとも考えられる<sup>4</sup>。

昭和34年(1959)1月3日、『毎日新聞』の「わが非文学的生活」なる記事において三島は、「一体文学的生活とは、孤独と閑暇の産物である。」と論じている。ボディビルについて、「こここそは、文士やそのオケラやあるいは様子ぶった上流気取が決して闖入してこない領域」と述べ、スポーツに没頭することが、文士たちとの交流を避け、「孤独と閑暇」を確保することに繋がると主張する。三島にとってボディビルを含むスポーツは、一人静かに机に向かうこととはまた別個の、創作に必要な「孤独と閑暇」であった。しかし現在も、思索する様子が分かりやすく伝わる頬杖をつくポーズに、知識人三島の肖像は結局のところ落ち着きがちである。三島は静止による「毒」を厭い体軀を鍛え続けたが、人との距離を保つことを重視していた点は、他の文士たちと共通していた。

三島が昭和44年(1969)に全共闘との討論会のため東京大学を訪れた際には、会場の900番講堂入口の付近に「東大動物園特別陳列品 近代ゴリラ」と揶揄するビラが貼られた<sup>5</sup>。こうした風刺が成立したのも、知識人が筋骨隆々たる身体であることに意外性があったためであるだろう。識者の「孤独と閑暇」がスポーツとは結び付きにくく、静寂や静止とともにあるものと見做された結果と言える。

昭和39年(1964)10月5日の『読売新聞』に掲載された三島の「実感的スポーツ論」によれば、「痩せていて、胃弱体質」であったことに「少年時代からの強烈な肉体的劣等感」を抱いていた三島が昭和30年(1955)にボディビルを始めた直接的な契機は、その年に『週刊読売』の記事で、玉利<sup>ひとし</sup>齊を知ったことであった。玉利が初代主将を務めた早稲田大学バーベルクラブが昭和28年(1953)に組織され、その後、週刊誌でもボディビルダーが取り上げられるなど、日本でボディビルの普及が進んだ背景に、戦後日本において、アメリカ兵の肉体に対する劣等感

4 新潮社ホームページ「初めて出会う新・三島由紀夫」シリーズ紹介

(<https://www.shinchosha.co.jp/shin-mishima/>) 2022年10月10日最終閲覧。

5 映画「三島由紀夫 vs 東大全共闘——50年目の真実」(豊島圭介監督、2020年)参照。

と憧憬があったことは、すでに論じられている<sup>6</sup>。屈強な身体への憧れは、三島個人のコンプレックスの問題にとどまらず、敗戦と占領により日本に広まっていたものであった。

ボディビルが普及する一方で、頬杖をつくポーズに代表される静かに思索する者というイメージが作家につきまとう中、「文士たちの闖入のない」領域に三島は深く踏み込んでいった。三島は、文士にも体力が必要であるという信念も有しており、その信念は自身の鍛錬に繋がるとともに、鍛錬しない者への批判にも繋がった。昭和30年（1955）の日記の体裁をとる評論・随筆『小説家の休暇』には、次のような太宰批判がある。

太宰のもっていた性格的欠陥は、少くともその半分が、冷水摩擦や器械体操や規則的な生活で治される筈だった。生活で解決すべきことに芸術を煩わしてはならないのだ。いささか逆説を弄すると、治りたがらない病人などには本当の病人の資格がない<sup>7</sup>。

この記述は6月30日付のもので、同年に三島がボディビルを開始するよりも数カ月遡るものであった。太宰の個人批判であるというよりも、「健全な生活」から芸術は生み出されるべきという三島の発想に基づく主張であったことは、後に書かれた『読売新聞』の次の記事により明確に表れている。

いまの三島さんには、このように文学から全く離れた、筋肉の動きだけに陶酔できる時間を持つことが、絶対に必要なのである。

「本来、暗い密室の作業である文学は、毒を持っている。それはほうっておけば、作家の身も心も滅ぼしてしまう。僕はその毒を生活ににじみ出させたくない。生活と芸術のバランスをとるためには、どうしてもスポーツの持つリズムや明快さが必要になるんです」

したがって剣道は三島さんにとって単なるレジャーではなくもっと積極的な精神の健康のための衛生法といえようか。

「太宰治が毎日冷水まさをやってれば、自殺しなくてすんだらうとって、たたかれたことがあるが、あれはそういう意味でした」

スポーツは、ヘミングウェイにとって生きるための宗教だったが、

6 天野知幸「三島由紀夫のボディビルとアメリカ——編集され、コラージュされる身体形成」『三島由紀夫研究』第17号（特集・三島由紀夫とスポーツ、2017年4月）参照。

7 三島由紀夫『小説家の休暇』新潮文庫、1982年、20頁。

この人には薬——それも単なる栄養剤でなく、飲まねばならない解毒剤なのである<sup>8</sup>。

「文学の“毒”を制する 黒胴にこもる激しい気合い」と題された昭和36年(1961)のこの記事によれば、文学は「暗い密室での作業」であり、作家の心身を蝕む「毒」であるという。三島はこの「毒」から逃れるための周囲との距離と閑暇を、スポーツに求めた。三島の思索は、頬杖をつき静止して行われるものばかりではなく、身体を動かしつつ行われるものでもあった。しかし、作家は孤独と静寂の中にあり、その状態にあって精神を毒されるものという価値観が、三島自身にも周囲にも共通認識として浸透していた。三島のスポーツ愛好は、戦後の日本人の多くが特にアメリカに対して抱えた身体的劣等感に加えて、文学を「毒」と見る価値観があったからこそ生み出されてきたものと考えられる。むしろ三島が、作家は心身を蝕みがちと見られてきたことをアンチテーゼから示したと言うことすらできる。

文学は「毒」であるとの感覚は、三島が批判した太宰の精神的不安定性や入水に具体例な根源を求めることができるだろう。さらに、太宰が敬愛した芥川の自死と、芥川の師である漱石の神経衰弱へと、ルーツを辿ることができる。自殺を遂げた作家には、早くは明治27年(1894)の北村透谷、明治41年(1908)の川上眉山、大正12年(1923)有島武郎などがおり、昭和に入ってから、昭和5年(1930)に生田春月、戦後も昭和26年(1951)に原民喜、昭和27年(1952)に久坂葉子などが続いた。昭和45年(1970)の三島の自死ののち、昭和47年(1972)には川端康成が亡くなっている。久坂葉子の例のほか、昭和21年(1946)に『二十歳のエチュード』を残し自殺した原口統三の影響を強く受けた長沢延子の昭和24年(1949)の服毒、遡れば昭和5年(1930)の金子みすゞと、女性作家の自死の例も少なくない。

作家の死の報道が続く中で、文学の「毒」に悩まされる姿にこそ作家らしさを見出す傾向が、メディアを通して培われていったのであろう。特に漱石、芥川、太宰ら、精神の不安定さに苦しみ、かつ、新聞に繰り返し写真が登場した作家たちの存在が、文学は心身を蝕むものとするイメージの定着に大きな影響力をもったことが見込まれる。頬杖は、知性と同時に、陰鬱な雰囲気表現し得るがゆえに、作家の肖像として写真を見る側の「期待」に応えるものであったと考えられるのである。

8『読売新聞』昭和36年(1961)7月7日夕刊第3面「[レジャー拜見] 三島由紀夫氏(作家) 文学の“毒”を制する 黒胴にこもる激しい気合い」。

## 文士と憂鬱——漱石、芥川、太宰の系譜

太宰治には、頬杖をつくポーズの写真が複数存在する。高校時代、弘前の藤田家に止宿していた頃に撮影された写真には、学生服姿および和服姿で、親指と人差し指を顎に添える太宰の姿が写っている（図版3-1,3-2,3-3）。これらの姿は、太宰が強い憧れを抱いていた芥川龍之介のポーズを意識したものと考えられる。よく似たポーズの写真が複数枚に及ぶところに、太宰の芥川への思い入れの強さを読み取ることができるだろう。



図版3-1,3-2,3-3 和服姿の太宰その1（昭和3年11月）、和服姿の太宰その2（昭和3年11月）、学生服姿の太宰（昭和4年3月）いずれも藤田本太郎氏撮影、弘前市郷土文学館所蔵

顎に手を添える芥川の写真は、彼の自殺を報じた昭和2年（1927）7月25日の『東京日日新聞』に掲載され、広く報じられたものであった（図版4）。同日の『報知新聞』と『時事新報』も、同じ写真を使用している。他の写真を用いた新聞もあったが、細面で眼光鋭く頬杖をつく姿は、生前撮影された芥川の写真の中でも、遺書「或旧友へ送る手記」に記された「ぼんやりとした不安」に苛まれ自死を遂げた作家の肖像として、新聞の読者に分かりやすく受け入れられる写真であったと推測できる。

顎に指をかける芥川の姿は、松田奈緒子『えへん、龍之介』（講談社、2011年）や「文豪ストレイドッグス」シリーズ（朝霧カフカ原作、春河35作画、漫画版はKADOKAWAより刊行、2013年より連載中）といった近年の漫画やアニメにも、彼のトレードマークとして継承されている。安藤公美氏が指摘するように、頬杖をつく芥川の姿は「アイコンとしての肖像」となり、現代に至るまで広く流布して

いる<sup>9</sup>。芥川には、神経質で不安定な気質を有するイメージが付きまとい続けている。

大正14年（1925）の『読売新聞』の記事において、観相家として名を馳せた小西久遠は、芥川の顔貌について、「文士としての神経質の典型を彼に見出す。鋭い眼、引締つた口元、高い骨つばい鼻、何れも神経的なやかましくむづかしい気質の象徴たらぬはない。」と評している<sup>10</sup>。芥川個人の気質の話題にとどまらず、「文士としての神経質の典型」なる単語が新聞に載るほどに、文士は神経質であるとの傾向がこの時期にすでに広く認められていた様子を、この記事から読み取ることができる。

芥川が師事した漱石もまた、神経衰弱に苦しんだ文士の一人であった。『東京朝日新聞』が大正5年（1916）12月10日



図版5 『東京朝日新聞』大正5年（1916）12月10日第5面



図版4 『東京日日新聞』昭和2年（1927）7月25日第11面（部分）  
東京大学大学院情報学環所蔵

に漱石の死を報じた際に掲載した写真もまた、頬杖をつく姿であった（図版5）。絶筆の原稿に重ねて写真を載せる様式は、『東京日日新聞』の芥川の訃報と共通している。頬杖をつく姿は、苦悩する文士の肖像としてふさわしいものと捉えられたのであろう。漱石の死は、胃潰瘍と糖尿病の末のものであった。

漱石のこの写真は、大正元年（1912）9月、明治天皇大喪の礼に際し撮影されたものである。『東京朝日新聞』の訃報でもそうであったが、左腕に巻かれた喪章がトリミングされ掲載されることも多い

9 安藤公美「肖像写真（ポートレート）というメディア」関口安義編『生誕120年 芥川龍之介』翰林書房、2012年。

10 『読売新聞』大正14年（1925）1月24日朝刊4面「観相家の観た芥川龍之介君」。

一枚である（図版6）。この写真は、第一高等学校の同期生であり南満州鉄道株式会社総裁であった中村是公と、同株式会社理事の犬塚信太郎ともに、漱石が小川一真の写真館を訪れたときのものであった。漢学者の講演を企画する中村と犬塚に、漱石が東慶寺の禅僧、釈宗演を紹介するため北鎌倉に赴いた際に撮影されたもので、三人が並んで写っている別ショットもある。

ただし漱石が頬杖をつく姿は、撮影時の個別の文脈を離れ、「苦悩する漱石」「思索する漱石」を代表する写真として取り上げられる傾向がある。喪章のトリミングがなされると、文脈からの乖離はさらに加速する。頬杖をつく漱石の姿が象徴するものについて、中川成美氏は次の解釈を提示している。

なにものかに注がれたまなざしは、その対象が画面に提示されていないために抽象化され、この思索のポーズは自ずと漱石その人の内面を探ろうとする欲望を観る者にかき立てずにはおかない。明治天皇の死をもって顕現した明治という時代精神の終焉を、憂いを秘めた静謐な感情で見送ろうとする漱石。あるいは明治という時代の総てを生きて、その結末を哀惜を湛えて沈思する漱石。近代日本の最高の文学者、知識人の一人である漱石に似つかわしい解釈を、この写真は要求する。いや、それを要求するほどにこの思索する漱石は、実に立派な顔貌を備えている。知的な充実を遂げた男というイメージは思索するポーズによって強調され、その思惟を形而上的領域へと定着させようとする想像力を増幅していく<sup>11</sup>。

中川氏が論じる通り、漱石の知性は、思索する姿により可視化されている。一方でその思索は、知性を最上級まで研ぎ澄ませるものであったと同時に、神経を



図版6 『漱石写真帖』（岩波書店、2002年）より転載

11 中川成美「漱石の20世紀——動く肖像写真」西川長夫・姜尚中・西成彦編『20世紀をいかに越えるか——多言語・多文化主義を手がかりにして』平凡社、2000年、243～244頁。



苦しめるものともなった。漱石が神経衰弱に陥り、胃痛に苦しんだ時代は、「天才」と「狂気」「頽廢」を結び付ける言説が日本で浸透した時代でもあった。漱石は、知識人が精神を病む様子を近代の日本に提示した一人でもあった。文学に「毒」があるとの発想も、漱石の頃から強まったことが想定される。そして漱石晩年の弟子である芥川が活躍し、昭和のはじめに亡くなる頃には、文学者は神経質であるという言説が広まっていたことが、先に引用した芥川の新聞記事から窺えるのである。

作家の創作活動がやがて死をもたらす「毒」となり得るという見解が広がった背景には、西洋の精神医学の影響を見ることができそうである。犯罪心理学の創始者とされるイタリアの精神科医チェザレ・ロンブローゾ (Cesare Lombroso, 1835~1909) が日本で最初に紹介されたのは、明治20年(1887)に創刊された『哲学会雑誌』の第2号(同年刊)であった<sup>12</sup>。ロンブローゾの名は、明治30年代には『教育学術界』、『神経学雑誌』、そして医学史家の富士川游が編集した『人性』といった雑誌に繰り返し登場するようになり、明治43年(1910)の『白樺』第1巻第6号・第7号では、柳宗悦が「新しき科学」と題した論考でロンブローゾを取り上げるに至っている。罪を犯しやすい人物など、人間の類型化が可能であるとする「実証的」人類学の移入は、特定の職業と人間性を結び付ける傾向を強めたと考えられる。

柳はまた、ドイツで1892年に『頽廢論』(*Die Entartung*) を出版したマックス・ノルダウ (Max Nordau, 1849~1923) の名も紹介している。近代人の精神の変質を論じたノルダウの思想により、「天才」は「狂気」や「頽廢」と結び付けられた。不活発に閉じこもった状態で思索を続けた末に精神を病むという知識人像が広まる中に、漱石の死の報道はあった。類似した様式の訃報が新聞に掲載された芥川の死もまた、同様の近代人観、天才観のもとにあったと考えられる。頽杖をつき考え込む姿は、明治以降、精神を蝕まれる者の姿として暗く重い意味を持つようになっていった。

大正5年(1916)12月17日の『東京朝日新聞』朝刊第五面には、「解剖から見た漱石氏 天才に能くある追跡狂的の症状」と題された、漱石の脳と腹部の解剖を行った東京帝国大学医科大学教授長与又郎の講演の内容が報じられている。長与はノルダウ、ロンブローゾの名を挙げつつ、次のような所見を提示した。

脳髓の重さと其の廻転の様子は常人に優れ脳の能力の如何に卓越せるかを證している (中略)

12 岡田温司『ミメーシスを超えて——美術史の無意識を問う』勁草書房、2000年、1~40頁。

奥様のお話に先生は病気になるると追跡症と言つて「自分に誰かゝ悪口を言つて居る」とか変なことを言ふことがあつた、此の症状の原因は解剖の結果判らないだろうと言ふお話であつたがこれはさう一寸判るものではないが有名なるノルデン氏の言の如く糖尿病の患者に往々にして起る症状で且つ天才の人によくある狂的発作として見るべきである多くの天才者は狂者と非常に縁の近いものであると云ふはロンブローゾあたりの言ふ處だが先生のは天才者其の病気の素質があつた処へ糖尿病にかかられたものだから斯かる狂的症狀を現されたものとも考へられる<sup>13</sup>

医学博士による解剖所見という科学的な根拠に基づき、天才と心の病は直接的に結び付けられた。長与は別の文章で、「事実、糖尿病患者は、よくメランコリーに陥ることがあつて、時とすると自殺をさへ決行する。」とも述べている<sup>14</sup>。漱石の死の報道は、「狂気」「メランコリー」と「天才」の結びつきを強めるものであった。そして漱石以後、作家のイメージに、メランコリーの図像とされる頬杖をつく姿が目立つようになってゆく。



図版7 Ugo Zannoni  
«Dante», Piazza dei  
Signori, Verona, 1865.  
Wikimedia Commons  
より転載



図版8 Attilio Ungaudier  
«Ritratto di Dante», oil on  
canvas, 143.0 × 95cm,  
Museo Dantesco, Ravenna.  
Wikimedia Commons  
より転載



図版9 William Hilton «John  
Keats», oil on canvas, 76.2 ×  
63.5cm, c. 1822, National Portrait  
Gallery, London. Wikimedia  
Commons より転載

13 註12前掲、岡田論文参照。新聞引用は、朝日新聞データベースのほか、平野清介編著『新聞集成夏目漱石像(2)』明治大正小尾和新聞研究会、1979年、356～357頁を参照した。

14 註12前掲、岡田論文参照。長与又郎「夏目漱石氏剖検」(『新小説』臨時号、大正6年1月)平岡敏夫編『夏目漱石研究資料集成』第3巻、日本図書センター、1991年、10頁。

『白樺』の同人たちが「天才」として注目したオーギュスト・ロダン (Auguste Rodin, 1840~1917) の代表作「考える人」*«Le Penseur»* もまた、頬杖をつく人物のブロンズ像である。1881年から1882年にかけて原型が作られたこの作品の原題は、「詩人」*«Le Poète»* であった。地獄の門を前にする詩人ダンテ (Dante Alighieri, 1265~1321) ともされるこの姿は、詩人は思索し苦悩する存在であるという、19世紀の西欧における文学者観を表現しているだろう。近代日本における作家の肖像はまさに、西欧のこの価値観の影響を強く受けたものであった。

ダンテの肖像は早くから複数作られているが、頬杖をつく姿で表される例は、1865年に作られたヴェローナのシニョーリ広場の彫像 (図版7) や、19世紀半ばに描かれた油絵 (図版8) など、19世紀以降に多い。ジョン・キーツ (John Keats, 1795~1821) (図版9) やオスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854~1900) (図版10) などの絵画や写真の例を見ると、19世紀には、頬杖をつく姿が詩人の肖像の典型として定着していた様子が窺える。

頬杖が鬱気質を表すことについては、アルブレヒト・デューラー (Albrecht Dürer, 1471~1528) の*«Melencolia I»* (1514年) (図版11) の図像解釈で広く知られている。詩人たちの頬杖もまた、憂鬱を表すものであった。鬱気質は黒胆汁によるものとする古代ギリシアのヒポクラテス (Ἱπποκράτης, c. 460~c. 370 BC)、ローマのガレノス (Γαληνός, 129~c. 216) に遡る四体液説は、中世以降には占星術とも結びつき、土星が黒胆汁質と結び付けられ、近代医学の発展以前、ヨーロッパで



図版10 A photograph of Oscar Wilde by Napoleon Sarony, New York, 1882. Wikimedia Commons より転載



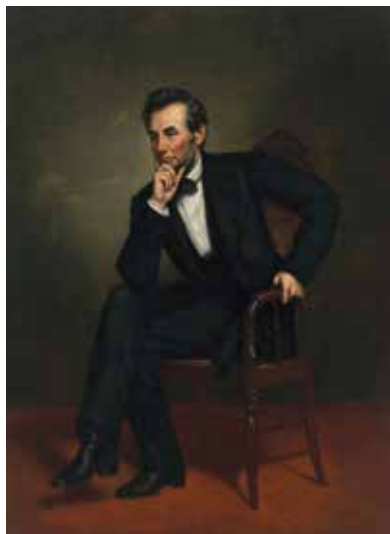
図版11 Albrecht Dürer, *«Melencolia I»* 24 × 18.8 cm, 1514. Wikimedia Commons より転載

長く広く知られていた<sup>15</sup>。デューラーがこの銅版画で描いた女性について、パノフスキー（Erwin Panofsky, 1892～1968）は次のように分析する。

メレンコリアは、極度の覚醒とでもいえる状態にある。彼女の凝視は、むなししいとはいえ一心こめた探求の凝視である。彼女が不活潑なのは、怠惰のために活動できないからではなく、活動が彼女にとって無意味になってしまったからであり、彼女の活気は睡眠ではなく思索のために麻痺しているのである<sup>16</sup>。

デューラーの版画では、外からの刺激を遮断し省察する自閉的な状態が、翼を持ちながら飛ばずに座して頬杖をつく人物で表現されている。動かず思慮するさまは、まさに三島が文学の「毒」と称した、密室における作家の「孤独と閑暇」に相応するであろう。憂鬱を表す姿勢として定着していた頬杖が、思慮深い知識人の肖像のポーズとなり、西欧から絵画や写真の技術が伝わったことで、日本にも広まったことが想定される。

漱石が手本とした肖像は特定が難しいものの、1887年に描かれたリンカン（Abraham Lincoln, 1809～1865）（図版12）や、1888年に撮影されたエジソン（Thomas Edison, 1847～1931）（図版13）が頬杖をつく姿勢をとる様子からは、19世紀後半の肖像において頬杖が知性を表すポーズとして選ばれており、著名な知識人の肖像は、日本人にも伝記等で知られるところとなったことが推測される。天才は苦悩する存在であり、苦悩する者は天才であ



図版 12 George Peter Alexander Healy, «Abraham Lincoln», Oil on canvas 188 × 137cm, 1887, National Portrait Gallery, Smithsonian Institution, Washington, D.C.  
[https://npg.si.edu/object/npg\\_NPG.65.50](https://npg.si.edu/object/npg_NPG.65.50)

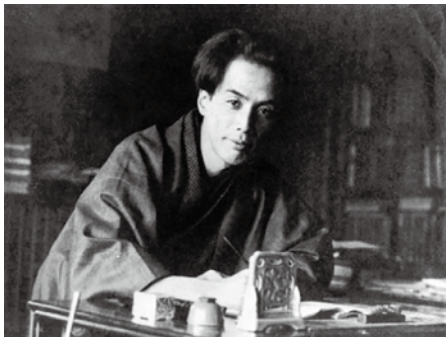
15 谷川多佳子『メランコリーの文化史——古代ギリシアから現代精神医学へ』（講談社選書メチエ、2022年）など参照。

16 アーウィン・パノフスキー著、中森義宗・清水忠訳『デューラー——生涯と芸術』日貿出版社、1984年、161頁。

るといふ論理から、頬杖は肖像に知性が求められる場合に人気を博したものと考えられる。そして知性には苦悩がつきものという発想が、先述のように、19世紀には日本でも定着していったものと推測される。

頬杖をつくポーズではないが、大正10年(1921)3月に弟子の南部修太郎により撮影された書齋でペンを執る芥川の写真は、芥川の没後、三円で販売され広まった(図版14)。昭和2年(1927)に『文藝春秋』が行ったこの特別頒布には、のちに資生

堂写真部を設立するに至った福原信三が携わっていたという<sup>17</sup>。『半生の記』によれば、松本清張も、この芥川の写真を取り寄せた一人であった<sup>18</sup>。昭和期に入ると作家の写真の流布がさらに進み、作品に著者近影が付されるのみならず、プロマイド的に流通するようになった。芥川は、肖像写真の面でも人気作家の一人であった。



図版14 大正10年(1921)3月南部修太郎撮影芥川龍之介 Wikimedia Commonsより転載



図版13 沢田謙『エヂソン伝』(講談社、1938年)「不眠不休五昼夜蟬製円壙型蓄音機を完成した時のエヂソン(1888年6月)」160頁、国会図書館デジタルコレクションより転載  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1719961>

南部の撮影した写真は、大正12年(1923)12月6日の『読売新聞』朝刊第7面では「煙草と茶で年中胃病に悩まされながら食物だけは特に吟味する芥川龍之介氏」として紹介されていた。この記事において、芥川は「いづれにせよ、芥川氏は巷の人ではない、巷に立つて群衆を相手にする人ではない、静かに書齋に在つて思索すべき人である。」と評されている。書齋は

17 註9前掲安藤論文による。福原の写真への取り組みについては、戸矢理衣奈『銀座と資生堂——日本を「モダン」にした会社』(新潮選書、2012年)に詳しい。

18 松本清張『松本清張全集 第34巻 半生の記・ハノイで見たこと』文藝春秋、1974年、22頁。註9前掲安藤論文による。

作家を周囲から隔絶させる空間であり、その中で思索にふけるのが作家であるというイメージの普及を、芥川の写真は促進した。また、作家は不健康な生活を送りがちという印象を定着させることにも、一役かったものと推定できる。

国立国会図書館が提供する、「近代日本の形成に影響のあった、政治家、官僚、軍人、実業家、学者、芸術家等約800名の肖像写真」のデータベースである「近代日本人の肖像」(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)には、多様な職業の人々の頬杖をつく肖像が掲載されている。作家のほか、多くの知識人の写真に頬杖をつく姿が認められるが、軍人には例がない。頬杖は、思慮する姿であると同時に、判断に時間を要し困惑する姿という意味も持ちうる。頬杖は、武人が人に見せるべき姿ではなく、思索する文人のとり姿勢と見なされてきた結果が、軍人の肖像写真の傾向にも現れているのであろう。武人の当惑は、部下の死傷にも直結し得る。肖像の傾向からは、憂鬱である状態、すなわち思索し静止する状態を求められる職業と望まれない職業との区別の所在を窺い知ることができる<sup>19</sup>。

作家の場合は、同データベースでも頬杖をつく姿が多数認められる。ポーズの流布の契機を作ったのは、訃報に頬杖をつく姿が用いられた漱石や芥川であったと考えられる。昭和5年(1930)、『夜ふけと梅の花』を刊行することとなった井伏鱒二は、近隣の写真店で撮影した近影を新潮社の若い社員から「結婚の見合い写真のよう」と評され、「欲をいへば、芥川さんのやうに頬杖をつくとか何とかして、抒情的にした方が宜しいですね」と指摘され、撮り直すに至った<sup>20</sup>。頬杖をつく姿の代表格としての芥川の存在感、そして作家の肖像といえれば頬杖をつく姿勢であるというイメージの流布が確認できる逸話である。

宮沢賢治や太宰治には散策する姿の写真もあるが、彼らもまた、屋外にあっては群衆とは距離を置いていた。三島も、ボディビルを孤独と閑暇を確保するものとして位置づけていた。書齋は、作家が自分だけの時間を過ごしていることを分かりやすく提示する空間であったと言える。『毎日新聞』において「書齋めぐり」なる連載が昭和28年(1953)から2年にわたり全160回も続いたことは、戦後の住宅の再建や新築が目された時期ならではの記事であったと同時に、知識人の人となりや思索の原点を示す場所として、書齋が広く重要視されていたことを示しているだろう。

19 学者、教育者についても頬杖をついた写真の例は多く、銅像でも、たとえば東京大学本郷キャンパス構内に設置されている元総長の濱尾新像(昭和7年(1932)掘進二(東京帝大工学部建築学科非常勤講師)作、271.5×160.0×240.0cm)は、頬杖をつき、足を組む姿である。濱尾像は微笑をたたえており、足組みのポーズと併せて、リラックスした様子でキャンパスを見守る姿である。

20 井伏鱒二『井伏鱒二全集』第22巻、筑摩書房、1997年、425～426頁。註9前掲安藤論文参照。なお、この若い社員は、のちに新潮社の代表取締役となった佐藤敏夫であったという。紅野謙介『書物の近代』(筑摩書房、1992年)参照。註9前掲安藤論文による。

頬杖をつく漱石の姿は写真館で撮影されたものであったが、書齋で写された漱石の写真も残されている。書齋にカメラが入り込むことは、作家が執筆のため孤独で自閉的な状態にあるはずの場所が公開されることに繋がった。自閉と公開という矛盾する要素を両立させたのが、作家がカメラの前で思索にふけることであり、排他的な状態を形成する頬杖をつく行為であったと考えられる。文学には「毒」があり、その「毒」のありどころである書齋や、頬杖をつき自閉的な状態にある姿に、新聞などのメディアは作家の特質を見た。そして写真の普及と報道により、本来は「孤独と閑暇」を確保する場であったはずの書齋は、広く人々の知るものとなり得ていった。

### 頬杖の前近代と現代——排他と親密さと

明治以後に頬杖に強くまわりついた暗く重いイメージを論じてきたが、近代以前の日本にも、頬杖をつく文筆家の肖像は存在した。天保7年（1836）から明治元年（1868）の長きにわたり菊池容齋が手がけた『前賢故実』には、500余人の歴史上の人物の略伝と肖像が集められている。同書において卜部兼好は、灯火のもと頬杖をつき筆を執る姿で描かれている（図版15）。兼好の肖像には、『兼好法師家集』のほか、勅撰集である『風雅和歌集』にも入集した詠「おもひたつ木曾のあさきぬあさくのみ そめてやむへき袖の色かは」が添えられている。この歌を引く室町期の説話集『吉野拾遺』は、兼好は後宇多院崩御の後、諸国をさすらい、木曾に庵を結ぶに至ったとする<sup>21</sup>。世の喧騒を避け暮らしていたが、山奥の庵にまで大勢訪ねてくる人がいたため、兼好はここも浮世と感じ、のちに居を移したとされる。次に引用する『徒然草』第十三段に記された灯下で書を読む姿もふまえたとみられる、草庵で静謐に暮らす姿を描いた肖像である。



図版 15 『前賢故実』 卷第八卜部兼好 国会図書館  
デジタルコレクションより転載  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/778222/1/1>

21 「吉野拾遺」『群書類従』第27輯（訂正三版）、続群書類従完成会、1978年、536頁。

ひとり、燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞこよなう  
慰むわざなる。

文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことは、南華の篇。この国の  
博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなること多かり<sup>22</sup>。

『前賢故実』は、ひとり心を澄ます兼好の姿を肖像に選んだ。目線を落とし頬杖  
をつく姿には、自分の世界に没頭できている様子を見て取ることができる。この場  
合の自閉的状态は、文学の「毒」に侵されているというよりもむしろ、世の煩わし  
さから逃れることのできた状態を表す、理想的な文学者の姿と見ることができる。

『前賢故実』では他に、巻第五に取り上げられた紫式部が、髪を押さえ書物を  
読みふける姿で描かれている（図版16）。頬杖とはまた少し異なるポーズではあ  
るものの、自閉的な状態にある。この姿は、『紫式部日記』の次の記述に基づき  
描かれたものであった。

大きな厨子一よろひに、ひまもなく積みてはべるもの、ひとつにはふ  
る歌、物語のえもいはず虫の巢になりたる、むつかしくはひ散れば、  
あけて見る人もはべらず、片つかたに、書ども、わざと置き重ねし人も  
はべらずなりにし後、手ふるる人もことになし。それらを、つれづれせ  
めてあまりぬるとき、ひとつふたつひきいでて見はべるを、女房あつま  
りて、「おまへはかくおはすれば、御幸ひはすくなきなり。なでふをん  
なかな真名書まんなぶみは読む。むかしは経読むをだに人は制しき」と、しりうごち  
いふを聞きはべるにも、物忌みける人の、行末いのち長かめるよども、  
見えぬためしなりと、いはまほしくはべれど、思ひくまなきやうなり、  
ことはたさもあり<sup>23</sup>。

紫式部は、夫の藤原宣孝亡き後、残された厨子の蔵書を、時間のできたときに  
引き出して読んだという。女性が漢籍を読むことについて、女房たちに陰口を言  
われても、反論を控えつつ書物を読み続けた。周囲に心を閉ざし、読書に没頭す

22 小川剛生訳注『新版 徒然草』角川文庫、2015年、25頁。兼好に文読む姿の肖像が他にも複  
数あることについては、島内裕子氏の論考がある。島内裕子「本を読む兼好」『徒然草文化圏の  
生成と展開』（笠間書院、2009年、初出・田村俊作編『文読む姿の西東——描かれた読書と書物史』  
慶應義塾大学出版会、2007年）、島内裕子『兼好 露もわが身も置きどころなし』（ミネルヴァ書房、  
2005年）第3章「描かれた兼好」参照。

23 藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注・訳『新編日本古典文学全集 第26巻 和泉式  
部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』小学館、1994年、204頁。



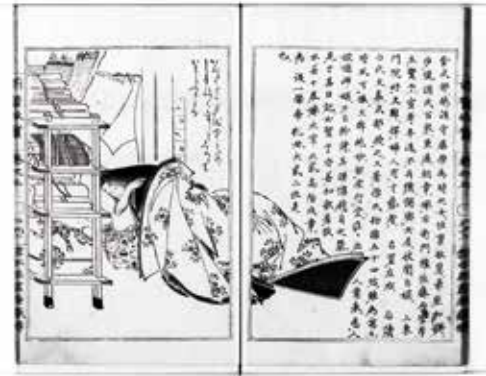
る姿を表すにあたり、菊池容斎は、平安当時、美の基準として重視されていた髪を身なりを気にせず押さえつける式部を描いた。周りの評価を意に介さず、自分の世界に没頭できる時間こそが文学を生み出すとの解釈から生み出された肖像であるだろう。「つれづれせめてあまりぬるとき」が文学の源泉となるという発想は、兼好の肖像に通じるものがある。

なすこともなく、また、話し相手もない状態、まさに「孤独と閑暇」が文学の源であるとする思考は、三島にも通底するものがある。三島や近代人は静止に文学の「毒」を見たが、その毒性は明治以後に強調されたもので、兼好や式部の「自閉」には、「毒」に苦しむ様子よりも、しがらみや喧騒から逃れることができた静謐な状態を見てとることができる。

週れば、頬杖をつき思索する像の早い例として、広隆寺の弥勒菩薩像を挙げることができる。微笑をたたえた菩薩像の表情は穏やかであり、陰鬱さは認めがたい。ただしこの菩薩像には、戦後まもなく紙幣のデザインに提案された際、



図版 17 五百円券圖案  
画像提供:凸版印刷株式会社



図版 16 『前賢故実』 巻第五 紫式部 国会図書館  
デジタルコレクションより転載  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778219>

GHQから、日本国民の悲痛の感情を表している、GHQがいつ帰国するかを黙想していると指摘され、却下された経緯がある(図版17)<sup>24</sup>。思考する内容の解釈に、鑑賞される時代の状況が色濃く反映された例の一つである<sup>25</sup>。文筆家の頬杖についても、静かな隠遁状態よりも憂鬱や神経質といった意味を読み取ることが増えた

24 日本銀行ホームページ公表資料・広報活動「お金の話あれこれ(4)」より「デザインの変更を余儀なくされた日本銀行券」(写真提供 凸版印刷株式会社)  
<https://www.boj.or.jp/announcements/education/arekore4.htm>

および平沢正夫「戦後博物誌 10円札の秘密」『太陽』第7号(1964年1月)参照。

25 広隆寺の弥勒菩薩像については他に、ドイツの哲学者カール・ヤスパースが「この仏像は、我我人間の持つ『人間実存に於ける永遠なるもの』の理念を完全無欠に表徴しているものです……」と語っていたことが、篠原正英「敗戦の彼岸にあるもの」(弘文堂、1949年)の100頁に記載されている。

のは、近代以後ならではの出来事であると推定される。

半跏思惟を意識した姿態とも指摘される肖像に、顔をしかめ頬杖をつく家康を描く「徳川家康三方ヶ原戦役画像」がある(図版18)<sup>26</sup>。「<sup>しかみ</sup>顰像」の通称もあるこの肖像をめぐっては、三方ヶ原の戦いで武田軍に大敗を喫した家康が自戒のため座右に置いた像であったとの伝承がある。ただしその伝承は、後世に付加されたものであったことが、原史彦氏により指摘されている<sup>27</sup>。当惑とも焦燥とも解釈できる表情の力に加えて、頬杖が物事を考えるしぐさであるがゆえに、物語を喚起させてきた絵であったと考えられる。家康の表情には、退廃的な苦悩というよりは、逡巡や困惑を読み取ることができる。家康の「顰像」の成立や伝来に関して物語が成立しているのも、武将の肖像として希有な表情と姿勢であるためであろう<sup>28</sup>。近代以降の軍人の肖像に頬杖をつく姿が少ない傾向にあることに通じるものがある。



図版 18 徳川家康三方ヶ原戦役画像  
桃山時代 16世紀 37.7 × 21.8cm 一幅  
徳川美術館所蔵 © 徳川美術館イメージ  
アーカイブ/DNPartcom

近代以前の頬杖について、もう少し例を見てみよう。紫式部が著した『源氏物語』にも、登場人物たちが「つらづえ」こと頬杖をつく場面が四例存在する。帚木巻、葵巻、滯標巻、若菜上巻であり、該当箇所はそれぞれ次の通りである。

26 松島仁『徳川將軍権力と狩野派絵画——徳川王権の樹立と王朝絵画の創生』ブリュッケ、2011年。

27 原史彦「徳川家康三方ヶ原戦役画像の謎」『金鯢叢書』第43輯、2016年3月。

28 Dorothea Lange «Migrant Mother» (1936) を教材として、困惑の表情で頬杖をつく女性の写真から何を読み取ることができるかを問う課題が、現代の高校国語の教科書にある(筑摩書房『現代の国語』2022年、第1章「問うこと、語ること」)。表情と姿勢が訴える不安の強さは、顰像にも共通する。

## 帯木巻

近くみ寄れば、君も目覚ましたまふ。中将、いみじく信じて、頬杖をつきて向かひるたまへり。<sup>のり</sup>法の師の、世のことわり説き聞かせむ所の心地するも、かつはをかしけれど、かかるついでには、おのおの睦言もえ忍びとどめずなむありける<sup>29</sup>。

## 葵巻

君は、西のつまの高欄におしかかりて霜枯れの前裁見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、「雨となり 雲とやなりにけん、今は知らず」とうち独りごちて頬杖つきたまへる御さま、女にては、見棄てて亡くならむ魂かならずとまりなむかしと、色めかしき心地にうちまもられつつ、近うつゐるたまへれば、しどけなくうち乱れたまへるさまながら、紐ばかりをさしなほしたまふ<sup>30</sup>。

## 滯標巻

外は暗うなり、内は大殿油のほのかに物より透りて見ゆるを、もしやと思して、やをら御几帳のほころびより見たまへば、心もとなきほどの灯影に、御髪いとをかしげにはなやかに削ぎて、倚りゐたまへる、絵に描きたらむさましていみじうあはれなり。帳の東面<sup>ひむがしおもて</sup>に沿い臥したまへるぞ宮ならむかし、御几帳のしどけなく引きやられたるより、御目とどめて見通したまへれば、頬杖つきて、いともの悲しと思いたるさまなり。はつかなれど、いとうつくしげならむと見ゆ<sup>31</sup>。

## 若菜上巻

言ふかひなげにとりなしたまへば、恥づかしうさへおほえたまひて、頬杖をつきたまひて寄り臥したまへれば、<sup>すずり</sup>硯を引き寄せて、…（後略）<sup>32</sup>

29 『源氏物語』の引用は、いずれも阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集 第20巻～第25巻 源氏物語(1)～(6)』(小学館、1994年～1998年)による。以後、新編全集①～⑥のように略する。この引用箇所は、①70～71頁。下線は筆者による。後掲の国歌大観の引用の下線も同様。

30 新編全集② 54～55頁。

31 新編全集② 312頁。

32 新編全集④ 64頁。

葵巻では、葵の上を亡くした源氏が、時雨の降る日暮れに前栽を眺め独りつぶやく場面で、頬杖をついている。悲しみを吐露する源氏の姿を見た頭中将は、自分が女性で、この人を残して先立つことがあれば魂がこの世にとどまってしまうに違いないと感じ、見守らずにはいられなかった。若菜上巻でも、頬杖をつくのは源氏である。降嫁した女三の宮のもとに通うことに躊躇する源氏は、紫の上に正直な気持ちを吐露し、甘えた表情を見せた。自分でもどうすればよいか分かりかね困惑しているさまを紫の上には隠さず見せる場面で、源氏は頬杖をついている。

帚木巻で頬杖をつくのは、頭中将である。宿直の夜、源氏とともに左馬頭の恋物語を聞くことに興味を示す中将が、頬杖をついている。男女のことを包み隠さず話し合う場面で、頬杖が登場する。また濡標巻には、前斎宮、のちの秋好中宮が頬杖をつき物思いにふけるさまを源氏が垣間見る場面がある。母である六条御息所が病に伏せる傍らで、もの悲しい面持ちを見せる前斎宮の姿を源氏が垣間見て、心惹かれるさまが描かれている<sup>33</sup>。

いずれの場面にも共通するのは、頬杖は心を砕いた人に見せる姿態であり、容易には見られないものであるためか、その姿をふいに垣間見た者は、恋慕の情を抱く点である。濡標巻では、髪が美しく、物に寄りかかる前斎宮の姿は、「絵に描きたらむさまざまにいみじうあはれなり」と記されている。しどけない姿が艶やかに見えるためか、画題として好まれたようで、頬杖をつく人物を描く絵画には、平安時代に遡る現存作例がある（図版19）。四天王寺所蔵の扇面法華経冊子に描かれた公卿と童女も、親しげな雰囲気であり、リラックスした表情を見せている。頬杖のうち、特に微笑をたたえるものは、一人穏やかな心境にあるか、もしくは、目の前の相手に心を開き、親密である例が少なくないようだ。

和歌でも、頬杖の用例には、絵に描かれた人物を詠むものが多い。『新編国歌大観』で頬杖を詠む歌は、他の歌集への重複収録を除くと10例、詞書に頬杖が登場する例が7例である。これらのう



図版19 扇面法華経冊子 巻第一 扇十「歌杖梶の葉図」文を読む公卿童女 平安時代(12世紀) 四天王寺所蔵 国宝『四天王寺所蔵 国宝 扇面法華経冊子』(四天王寺、2021年)より転載

33 太田敦子「頬杖をつく秋好中宮——『源氏物語』「濡標」巻を起点として」『文学・語学』第189号(2007年11月)参照。

ち5例は、画中の人物が物思いにふけるさまを詠む次のような歌である。

屏風に終夜物おもひたる女つらづをつきてながむるに  
よすながら物おもふときのつらづはかひなたゆさもしらずぞ有りける  
『伊勢集』173 伊勢大輔

ゑに、やまざとなるをんなのつらづをつきて人まつかたかきて侍り  
しところに  
すみしれる月とみつるにこととはん人まつよひの秋の山かぜ  
『兼澄集』134 源兼澄

もの思ふころ、ゑに、つらづつきたる男ある所  
ゑみながらそでこそぬるれかぎりなくしのびあまれるかたとおもへば  
『道信集』43 藤原道信

ゑに、むめの花見るとて、女、つまどおしあけて、二三人あたるに、  
みな人人ねたるけしきかいたるに、いとさだすぎたるおもとの、つら  
づついでながめたるかたあるところ  
春の夜のやみのまどひにいろならぬころにはなのかをぞしめつる  
『紫式部集』46 紫式部

大殿の歌絵の中に、男のつらづをつきてゐたるまへにこひ思ひあり、  
またへといへるものあり、鶴むかひてたてり、からの女ひとりある所を  
よめる  
こひしともいささはいはじとしをへてうきから人を思ひづるに  
『散木奇歌集』1110 源俊頼

和歌ではこのほか、頬杖が「杖」であることから、山や枝と結びつけて次のように詠まれる例も見受けられる。

なげきこる山としたかくなりぬればつらづのみぞまづつかれける  
『古今和歌集』卷第19 俳諧歌 1056 大輔 (但馬守 源 弼 の娘)  
みなもとのたすく

ことしげきこころよりさくものおもひのはなのえだをやつらづ糸につく  
『古今和歌六帖』2193、『夫木和歌抄』17351、  
『西本願寺本三十六人集』274、『貫之集』848 紀貫之

さらに、「杖」であることから、老いた体を支えるものとして「つら杖」が詠まれる次のような用例も見ることができる。

おきなさび立みもやすくをられねばつら杖つきてけふもくらしつ  
『永久百首』650 源兼昌

#### 夜眠易覚

ふさぬまの老をたすくるつら杖にかかりてさむる夢のみじかさ  
『草根集』10248 正徹

ある人のまがりたる木の枝のおのづからなるをけづりてつらづ糸に作  
りたるにゑりつくべき歌こひければ  
たすけあれや老のつら杖つき花をみるをりをりもかひなやすめて  
『鈴屋集』1615 本居宣長

頬杖が老いと結びつく連想は、近代以降はほとんど継承されなかったようである。ただし現代でも、人前で頬杖をつく行為が居眠りなどの怠惰を示すため止められることがあるのは、疲労などにより手で頭を支える必要がある実情からであり、ここに老いと類似性を見出すことはできそうである。老年と頬杖を結び付けることと必ずしもイコールではないが、頬杖は不活発性を示すというヨーロッパの伝統に通じる発想があると見ることもできるだろう。

歌の系譜を見ると、現代の歌謡曲にも、曲名や歌詞に頬杖が登場する例は少なくない。それらは、老いや疲労ではなく、恋愛の悩みを取り上げる場合が多い<sup>34</sup>。男に去られた女の心情を歌い上げた伊勢正三の「ほおづえをつく女」(1976年、作詞・作曲 伊勢正三)を早い例として、恋の悩みを抱えた女性の気持ちを歌う酒井法子「頬杖をつく夜」(1996年、作詞 秋元康、作曲 高橋研)、前田敦子「頬杖とカフェ・マキアート」(2016年、作詞 秋元康、作曲 平隆介)、乃木坂46「頬杖をつい

34 歌謡曲ではないが、早稲田大学の学生であった見延典子が文学部文芸科の卒業制作として執筆し、映画化もされ話題となった小説『もう頬づえはつかない』(講談社、1978年)は、愛と性に悩む女子大生の物語である。

ては眠れない」(2019年、作詞 秋元康、作曲 Super Mahirock) といったアイドルの歌曲にも、頬杖は繰り返し登場する。

ZIGGY「頬杖と有限の夜」(2007年、作詞・作曲 MORISHIGE, JUICHI) やタテタカコ「頬杖」(2007年、作詞・作曲 タテタカコ) では、前者では自身が思い悩む姿、後者では人の心を見通す相手の姿として、頬杖は歌われている。頬杖は自閉して思慮にふけるポーズであると同時に、向き合う相手と目を合わせて頬杖をつく場合、心の内を曝け出す姿勢にもなる。前田敦子の「頬杖とカフェ・マキアート」に「頬杖ついて 壁を作って 私の世界に一人きり」という歌詞がある一方で、来生たかおの「頬杖の幸福」(1998年、作詞 来生えつこ、作曲 来生たかお) に「もう何も言わず頬杖で見つめ合える」「頬杖のまま そのまま語り合う 関係」とあるのは、頬杖をつき自閉状態にある者が、特定の人物にだけ心内を明かす点において、矛盾はしていない。

頬杖をつく人間と至近距離で目が合うことは極めて親しい関係にあることを想起させるためか、頬杖は、アイドルの写真集などのポーズとしても頻出している。『芳本美代子写真集 頬杖について』(斎藤清貴撮影、ワニブックス、1987年) は、題名にも頬杖が用いられたアイドルの写真集である。漫画でも、まつもと泉『きまぐれオレンジ・ロード』第1巻(集英社、1984年)の表紙は、頬杖をつくヒロイン鮎川まどかである。まつもと氏のブログによれば、彼女のモデルの一人は中森明菜であったとされ、作中では、不良じみた美少女が主人公に心を開いてゆく様子が描かれてゆく<sup>35</sup>。

初見では分かりかねるヒロインの本当の姿が知られてゆく物語としては、『ティファニーで朝食を』(*Breakfast at Tiffany's*, 劇場版1961年)も挙げることができる。この映画のポスターで、オードリー・ヘップバーンが演じたヒロインのホリーは、キセルを手に頬杖をつき正面を見据えている。ホリーも鮎川まどかも芳本美代子も、みな頬杖をつき笑顔を見せる様子からは、頬杖はただ憂鬱を表すのみならず、憂鬱も含めて、心の内を相手に見せる親密さを表していると考えられる。

岡本太郎には、『午後の日』なる作品がある(図版20)。頬杖をつく子どもの顔は無邪気そうに見えるものの、瞳の奥にあるものを見通しきれぬ奥深さを感じさせる。東京都美術館ほかで2022年から開催された「展覧会 岡本太郎」の図録には、次のような作品解説が掲載されている。

35 まつもと泉氏ブログ「サイキンのまつもと」2015年9月25日記事  
<http://www.comic-on.co.jp/hidiary/hidiary.cgi?yyyy=2015&mm=09&dd=25>

頬杖について笑う子どもという、岡本作品には珍しく、穏やかな休息のイメージを持つ作品だが、同時にこの子どもは、中心で自分を二つに引きちぎっているようにも見える。笑いと空虚さが同居した仮面を掲げ、背後にある本当の顔を隠しているようにも見える。複合的なイメージを宿したこの岡本の自画像のような作品は、大きさを変えていくつか制作され、多磨霊園に眠る彼の墓碑ともなっている<sup>36</sup>。

「空虚さ」があると評された表情は、笑顔でありながらも、計り知れないものを感じさせる。胸襟を開き向き合うことで分かり合えるという期待と、人間の相互理解の難しさとの双方について考えさせる作品であり、岡本は、排他性と親密性の両方を生み出す頬杖の本質を鋭く見抜き、表現している。

現代では、SNSの普及により、一般人も自分の写真を公開する機会が増加している。自身の写真をアップする際に、知的に見せようとする目的以外にも、顔を小さく見せるためや、愛らしく見せるために頬杖をつくこともあるようだ。頬杖は、無邪気さを演出することもある。しかしそれらは見せたい姿の演出であり、「真実の姿」であるかどうかは、また別の問題である。

頬杖をつく作家の肖像写真も、前掲の図版2の三島のように遠くを見据えるものと、カメラ視線のものとの二種類に大別することができる。前者の場合は、距離は近くとも、その思考の深奥に歩み寄ることは困難な知恵者であることを感じさせる。後者の場合は、知識人の思考に肉薄する迫真さを感じさせる。思索にふける姿を公開するということは、被写体がどのような自身を見せたいか、どこまで自分を見せるかのせめぎ合いの中で行われてきた。頬杖という姿勢は、自閉と公開を両立させる砦として、カメラとの間に存在していると考えられる。作家は、閉じこもっての創作と創作物の発信という二つの方向性をもつ存在であることか



図版 20 岡本太郎《午後の日》1967年  
公益財団法人 岡本太郎記念現代芸術振興財団

36 「展覧会 岡本太郎」図録（東京都美術館、2022年）、258頁。



ら、頬杖をつき思索する姿を人に見せる肖像が多く成立するのであろう。

昭和期までの作家の肖像には、頬杖をつく姿のほか、書齋で喫煙具や筆記具を手にするものも多く見受けられた。禁煙は喫煙率が低下し、筆やペンからキーボードへと執筆の方法も変化し、作家の肖像の典型も変化しつつある。近年は、「遊牧民」を意味する語 *nomade* に由来する、特定の職場をもたず自由に移動する「ノマドワーカー」も目立ち始めている。作家の場合も、書物の山を背景にしたり、筆記具や原稿用紙を手にとったりという分かりやすい記号性は失われつつある<sup>37</sup>。そのような変化の中にあっても、思索する人物であることを示し得る記号として、頬杖は存在し続けている。周囲の記号のない中で、いかなる人物かを知ろうとする写真家や写真の鑑賞者と、どのような自分をどこまで見せるかを考える作家との間のバランスの取り合いが、頬杖という姿勢には残されていると考えられるのである。

## おわりに

日本の近現代作家について、特に三島から太宰、芥川、漱石の系譜をたどりながら、肖像写真に頬杖をつく例が多い背景をめぐり考察を行った。思索は精神を蝕み得るという思考と、知識人の肖像のポーズの流行が19世紀の西欧から流入する中で、頬杖をつく姿の肖像は、作家の肖像の類型として定着していった。文学を心身を侵す「毒」と見なし、頬杖を苦悩や憂鬱さと結び付ける言説には西洋からの影響が強く、近代以前の日本では、自閉的状态は、世の喧騒を逃れた静謐な状態として尊重されてきた。そして、物思いにふける姿を人に見せることは、心を開くことに結び付くものとして描写されてきた。

頬杖をつく肖像が多い背景には、孤独と閑暇の中で研ぎ澄まされた作家の感性に迫ることと、限られた者しか接することのできないはずの心が開かれた状態に肉薄することへの願望を反映した産物となっている。

周囲と距離をとり、閑暇を得ることで思索にふける作家たちが、人のいるカメラの前で思考する姿を見せるという矛盾を、頬杖というポーズは解消させてきた。頬杖が排他性を担保するからこそ、沈思黙考する姿が広く公開されることが可能となっているのである。

37 紫式部について、月を眺める姿で描かれる肖像が多かったところ、近代以降、石山寺参籠時に琵琶湖に映る月を見て『源氏物語』の執筆を思い立ったという起筆伝説の実証性が問われ、教科書等では、文机に向かい筆を手にする姿を描く姿が文筆家であることを示す絵として採用されたことについては、拙稿「紫式部の近代表象——古典文学の受容と作者像の流布に関する一考察」『鹿島美術財団年報』第33号別冊（2016年）で以前論じたところである。

## 図版一覧

- 図版1 『読売新聞』昭和42年（1967）7月2日朝刊「わが構想 地球につめ跡を 三島由紀夫」より 写真提供 読売新聞社
- 図版2 『読売新聞』平成27年（2015）7月8日東京朝刊文化欄「三島と五輪（上）想像は強い肉体から」より 写真提供 読売新聞社
- 図版3-1, 3-2, 3-3 和服姿の太宰その1（昭和3年11月）、和服姿の太宰その2（昭和3年11月）、学生服姿の太宰（昭和4年3月） いずれも藤田本太郎氏撮影、弘前市郷土文学館所蔵
- 図版4 『東京日日新聞』昭和2年（1927）7月25日第11面（部分）東京大学大学院情報学環所蔵
- 図版5 『東京朝日新聞』大正5年（1916）12月10日第5面
- 図版6 『漱石写真帖』（岩波書店、2002年）より転載
- 図版7 Ugo Zannoni «Dante», Piazza dei Signori, Verona, 1865. Wikimedia Commonsより転載
- 図版8 Attilio Ungaudier «Ritratto di Dante», oil on canvas, 143.0 × 95cm, Museo Dantesco, Ravenna. Wikimedia Commonsより転載
- 図版9 William Hilton «John Keats», oil on canvas, 76.2 × 63.5cm, c. 1822, National Portrait Gallery, London. Wikimedia Commonsより転載
- 図版10 A photograph of Oscar Wilde by Napoleon Sarony, New York, 1882. Wikimedia Commonsより転載
- 図版11 Albrecht Dürer, «Melencolia I» 24 × 18.8 cm, 1514. Wikimedia Commonsより転載

図版12 George Peter Alexander Healy, «Abraham Lincoln», Oil on canvas  
188 × 137cm, 1887, National Portrait Gallery, Smithsonian Institution,  
Washington, D.C.

[https://npg.si.edu/object/npg\\_NPG.65.50](https://npg.si.edu/object/npg_NPG.65.50)

図版13 沢田謙 『エヂソン伝』(講談社、1938年)「不眠不休五昼夜蠟製円壺型蓄  
音機を完成した時のエヂソン (1888年6月)」160頁、国立国会図書館デジ  
タルコレクションより転載 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1719961>

図版14 徳川家康三方ヶ原戦役画像 桃山時代 16世紀 37.7 × 21.8cm 一幅  
徳川美術館所蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ / DNPartcom

図版15 五百円券図案 画像提供：凸版印刷株式会社

図版16 大正10年(1921)3月南部修太郎撮影 芥川龍之介 Wikimedia  
Commonsより転載

図版17 『前賢故実』巻第八 ト部兼好 国会図書館デジタルコレクションよ  
り転載

<https://dl.ndl.go.jp/pid/778222/1/1>

図版18 『前賢故実』巻第五 紫式部 国会図書館デジタルコレクションより  
転載

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778219>

図版19 扇面法華経冊子 巻第一 扇十「歌枕梶の葉図」文を読む公卿童女  
平安時代(12世紀)四天王寺所蔵 国宝 『四天王寺所蔵 国宝 扇面法華経冊  
子』(四天王寺、2021年)より転載

図版20 岡本太郎《午後の日》1967年 公益財団法人 岡本太郎記念現代芸術振  
興財団

## 参考文献一覧

### ホームページ等

朝日新聞データベース クロスサーチ

毎日新聞データベース 毎索

読売新聞データベース ヨミダス歴史館

国立国会図書館「近代日本人の肖像」

<https://www.ndl.go.jp/portrait/>

新潮社ホームページ「初めて出会う新・三島由紀夫」シリーズ紹介

<https://www.shinchosha.co.jp/shin-mishima/>

日本銀行ホームページ「お金の話あれこれ（４）」

<https://www.boj.or.jp/announcements/education/arekore4.htm/>

まつもと泉氏ブログ「サイキンのまつもと」2015年9月25日記事

<http://www.comic-on.co.jp/hidiary/hidiary.cgi?yyyy=2015&mm=09&dd=25>

### 一次資料

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集

第20巻～第25巻 源氏物語（１）～（６）』小学館、1994年～1998年

井伏鱒二『井伏鱒二全集』第22巻、筑摩書房、1997年

小川剛生訳注『新版 徒然草』角川文庫、2015年

斎藤清貴撮影『芳本美代子写真集 頬杖ついて』ワニブックス、1987年

佐藤秀明編『三島由紀夫スポーツ論集』岩波文庫、2019年

相馬正一編著『新潮日本文学アルバム第19巻 太宰治』新潮社、1983年

平野清介編著『新聞集成夏目漱石像（２）』明治大正小尾和新聞研究会、1979年

長与二郎「夏目漱石氏剖検」(『新小説』臨時号、大正6年1月) 平岡敏夫編『夏

目漱石研究資料集成』第3巻、日本図書センター、1991年

塙保己一編「吉野拾遺」『群書類従』第27輯（訂正三版）、続群書類従完成会、1978年

藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注・訳『新編日本古典文学全集 第

26巻 和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』小学館、1994年

まつもと泉『きまぐれオレンジ・ロード』第1巻、集英社、1984年

松本清張『松本清張全集 第34巻 半生の記・ハノイで見たこと』文藝春秋、1974年

三島由紀夫『小説家の休暇』新潮文庫、1982年

三島由紀夫ほか著『三島由紀夫 VS 東大全共闘 1969-2000』藤原書店、2000年  
Yukio Mishima, Photography by Kishin Shinoyama, *The Death of a Man*, New York: Rizzoli, 2020

見延典子『もう頬づえはつかない』講談社、1978年

矢頭保写真、三島由紀夫序文『日本のボディビルダーたち』ウェザビル出版社、1966年

『現代の国語』筑摩書房、2022年

『漱石写真帖（漱石全集第4巻付録）』岩波書店、2002年

『薔薇刑 細江英公寫真集』集英社、1963年（復刻2015年）

「徒然草 美術で楽しむ古典文学」展（サントリー美術館、2014年）図録

特別展「兼好法師と徒然草—いま解き明かす兼好法師の実像—」(神奈川県立金沢文庫、2022年) 図録

特別展「徒然草と兼好法師」(神奈川県立金沢文庫、2014年) 図録

「聖徳太子 日出づる処の天子」展（サントリー美術館、2021年）図録

「生誕100年 岡本太郎」展（東京国立近代美術館、2011年）図録

「展覧会 岡本太郎」(東京都美術館、2022年) 図録

「夏目漱石と芥川龍之介」展（漱石山房記念館、2022年）図録

「平成30年度特別展 太宰治 三鷹とともに——太宰治没後70年」(公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団、2018年) 図録

『石山寺縁起絵巻』石山寺、1996年

石山寺監修、奈良国立博物館編『石山寺の美——観音・紫式部・源氏物語』石山寺、2008年

ブレイク・エドワーズ監督『ティファニーで朝食を』パラマウント配給、1961年（DVD、パラマウント ジャパン、2006年）

豊島圭介監督『三島由紀夫 VS 東大全共闘 50年目の真実』GAGA 配給、2020年（DVD、TBS、2021年）

東陽一監督『もう頬づえはつかない』ATG 配給、1979年（DVD、ジェネオン エンタテインメント、2004年）

## 二次資料

天野知幸「三島由紀夫のボディビルとアメリカ——編集され、コラージュされる身体の形成」『三島由紀夫研究』第17号（特集・三島由紀夫とスポーツ）、2017年4月

- 荒木浩「〈唐物〉としての「方丈草庵」——維摩詰・王玄策から鴨長明へ」『アジア遊学275「唐物」とは何か——舶載品をめぐる文化形成と交流』勉誠出版、2022年10月
- 飯田高誉「三島由紀夫の合わせ鏡としての横尾忠則の幻想」『三島由紀夫研究』第10号（特集・越境する三島由紀夫）、2010年11月
- 犬塚潔「細江英公写真集「薔薇刑」について」『三島由紀夫研究』第10号（特集・越境する三島由紀夫）、2010年11月
- 大塚英志「ミッキー・マウスと三島由紀夫の身体」『三島由紀夫研究』第10号（特集・越境する三島由紀夫）、2010年11月
- 太田敦子「頰杖をつく秋好中宮——『源氏物語』「滯標」巻を起点として」『文学・語学』第189号、2007年11月
- 岡塚章子『帝国の写真師 小川一真』国書刊行会、2022年
- 岡田温司『ミメシスを超えて——美術史の無意識を問う』勁草書房、2000年
- 川平敏文「兼好伝と芭蕉」『近世文藝』第65巻、1997年1月
- 木村伊兵衛ほか写真、朝日新聞社編『文士の肖像110人』朝日新聞社、1990年
- レイモンド・クリバンスキー、アーウィン・パノフスキー、フリッツ・ザクスル著、田中英道監訳、榎本武文ほか訳『土星とメランコリー——自然哲学、宗教、芸術の歴史における研究』晶文社、1991年
- 紅野謙介『書物の近代』筑摩書房、1992年
- 小林弘忠『新聞報道と顔写真——写真のウソとマコト』中公新書、1998年
- 佐藤守弘「痕跡と記憶——遺影写真論」帝塚山学院大学美学美術史・芸術学研究室『芸術論究』第29号、2002年3月
- 篠原正瑛『敗戦の彼岸にあるもの』弘文堂、1949年
- 椎根和『平凡パンチの三島由紀夫』河出書房新社、2007年（新潮文庫版2009年、VR的完全版2020年）
- 島内裕子「『前賢故実』に描かれた文学者たちの肖像」『放送大学研究年報』第38号、2020年3月
- 島内裕子「本を読む兼好」『徒然草文化圏の生成と展開』笠間書院、2009年（初出・田村俊作編『文読む姿の西東——描かれた読書と書物史』慶應義塾大学出版会、2007年）
- 島内裕子『兼好 露もわが身も置きどころなし』ミネルヴァ書房、2005年
- 関口安義編『芥川龍之介 生誕120年』翰林書房、2012年

- 多木浩二『肖像写真——時代のまなざし』岩波新書、2007年
- 館かおる編『女性とたばこの文化誌——ジェンダー規範と表象』世織書房、2011年
- 谷川多佳子『メランコリーの文化史——古代ギリシアから現代精神医学へ』講談社選書メチエ、2022年
- 田沼武能『文士の肖像』新潮社（とんぼの本）、1991年
- 凸版印刷株式会社百周年記念事業推進委員会編『凸版百年——凸版印刷株式会社百年史』凸版印刷、2001年
- 戸矢理衣奈『銀座と資生堂——日本を「モダン」にした会社』新潮選書、2012年
- 中川成美「漱石の20世紀——動く肖像写真」西川長夫・姜尚中・西成彦編『20世紀をいかに越えるか——多言語・多文化主義を手がかりにして』平凡社、2000年
- 永井久美子「紫式部の近代表象——古典文学の受容と作者像の流布に関する一考察」『鹿島美術財団年報』第33号別冊、2016年
- 南相旭『三島由紀夫における「アメリカ」』2014年
- ジャン＝リュック・ナンシー著、岡田温司・長友文史訳『肖像の眼差し』人文書院、2004年
- ジャン＝リュック・ナンシー、フェデリコ・フェラーリ著、林好雄訳『作者の図像学』ちくま学芸文庫、2008年
- 西法太郎「三島由紀夫——謎の裸体像 聖セバスティアンのポーズに籠めたもの（一）（二）（了）」『表現者』第72・73・74号、2017年5月・7月・9月
- 日本近代文学館編『教科書と近代文学——「羅生門」「山月記」「舞姫」「ころ」の世界』秀明大学出版会、2021年
- アーウィン・パノフスキー著、中森義宗・清水忠訳『デューラー——生涯と芸術』日貿出版社、1984年
- アーウィン・パノフスキー著、浅野徹ほか訳『イコノロジー研究（上）（下）』ちくま学芸文庫、2002年
- 原史彦「徳川家康三方ヶ原戦役画像の謎」『金鯢叢書』第43輯、2016年3月
- 原武哲『喪章を着けた千円札の漱石——伝記と考証』笠間書院、2003年
- 樋口進『輝ける文士たち——文藝春秋写真館』文藝春秋、2007年
- 樋口進・川本三郎『昭和文壇実録 小説家たちの休日』文藝春秋、2010年
- 平沢正夫「戦後博物誌 10円札の秘密」『太陽』第7号、1964年1月

松島仁『徳川將軍権力と狩野派絵画——徳川王権の樹立と王朝絵画の創生』  
ブリュッケ、2011年

向坂卓也「兼好法師の姿——県立金沢文庫所蔵品を中心に」特別展「徒然草と  
兼好法師」図録、神奈川県立金沢文庫、2014年

山内由紀人『三島由紀夫の肉体』河出書房新社、2014年